

平成25年12月25日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

**翻訳出版事業「アジアの現代文芸」シリーズ
の新刊と既刊の電子書籍化について**

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）が公益事業の一つとして行っております翻訳出版事業「アジアの現代文芸」シリーズの新刊と既刊の電子書籍化について、以下のとおりお知らせします。

電子書籍化事業は平成24年度に開始し、平成25年12月までに24点の作品を電子書籍化しました。

記

1. 新刊『ラオス現代文学選集』について

『ラオス現代文学選集』を二元裕子氏の翻訳により、紙の書籍および電子書籍として出版しました。

これは「アジアの現代文芸」シリーズの62冊目にあたり、ラオスとしては、20年ぶりの2冊目の作品になります。

ラオスの国土は日本の本州とほぼ同じ面積であり、山の多い地形、深い溪谷など、どこか日本に似通った地形を持つ東南アジアの内陸国です。

本作品集には、社会主義国ラオスの成立(1975年)前後から今日に至るまでの、ラオスの現代文学界を代表する作家6人(ドワンチャンパー、チャンティイー・ドゥアンサワン、ブンタノーン・ソムサイポン、ブンスーン・セーンマニー、フンアルン・デーンビライ、ドークケート)による17編の短・中編を収録しています。

これらの作品には、ラオスの年齢、性別、社会階層、職業も様々な主人公たちの喜び、哀しみ、苦悩などが生き生きと描かれています。

現代ラオスの人々の社会、生活、習慣、考え方などとともに、その背後にある歴史、風土にまで、思いを広げてお読みいただければ幸いです。

2. 電子書籍化について

新刊に併せて、今回も新たに既刊5作品を電子書籍化しました(既刊5作品の作品紹介は4～5ページ参照)。

電子書籍として無償公開している作品は平成25年10月までに公開した18作品とあわせて24作品となり、当財団ホームページ(<http://www.daido-life-fd.or.jp/>)上の「アジアの現代文芸電子図書館」からご覧になることができます。

【新たに電子書籍化した6作品】

	作品名(国名)	翻訳出版時期	著者	翻訳者
既刊	①ニ・ポロック (インドネシア)	平成2年 1月	ヤティ・マルヤティ・ ウィハルジャ	佐々木 重次 監修、山根 しのぶ訳
	②初夏 霞立つ頃 (ミャンマー)	平成2年11月	マウン・マウン・ ピュー	河東田 静雄
	③ヌキのいない旅 (インドネシア)	平成5年 4月	アイプ・ロシディ	粕谷 俊樹
	④鱈の涙(フィリピン)	平成9年 3月	アマド・V・ヘルナンデス	大上 正直監 修、蜂谷 純子 訳
	⑤ティンペーミン短編集 (ミャンマー)	平成22年 2月	ティンペーミン	南田 みどり
新刊	⑥ラオス現代文学選集 (ラオス)	平成25年12月	ドワンチャンパー他	二元 裕子

【これまでに電子書籍化した18作品】

作品名(国名)	翻訳出版時期	著者	翻訳者
①業の罨(タイ)	昭和61年 3月	ドゥアンチャイ	吉岡 みね子
②チャオプラヤー河の流れ (タイ)	昭和62年11月	サティエン・ チャンティマートーン	吉岡 みね子
③地、水そして花(タイ)	平成3年 7月	サクチャイ・バムルンポン	吉岡 みね子
④ミャンマー現代短編集1 (ミャンマー)	平成7年 2月	マウン・ターヤ他	南田 みどり
⑤ミャンマー現代短編集2 (ミャンマー)	平成10年 9月	マウン・ティンスン他	南田 みどり
⑥農園の日差し(ベトナム)	平成12年 9月	タック・ラム	川口 健一
⑦愛のかたみ (インドネシア)	平成14年10月	ヤティ・マルヤティ・ ウィハルジャ	山根 しのぶ
⑧敗者の勝利(タイ)	平成16年12月	セーニー・サオワポン	吉岡 みね子
⑨山の麓の老人 (マレーシア)	平成17年 3月	アジジ・ハジ・ アブドゥラ	藤村祐子、タイ バ・スライマン
⑩ビールーの少年時代 (インド)	平成18年11月	クリシュナ・ バルデーオ・ヴァイド	長崎 広子
⑪地獄の一三六六日(※) (カンボジア)	平成19年 2月	オム・ソンバット	岡田 知子
⑫罪との闘い(タイ)	平成20年11月	シーブーラパー	宇戸 清治
⑬幻想の国(タイ)	平成21年 9月	M.R. ニミットモンコン・ ナワラット	吉岡 みね子

作品名 (国名)	翻訳出版時期	著 者	翻 訳 者
⑭変革の時代(スリランカ)	平成23年10月	マーティン・ ウィクラマシンハ	野口 忠司
⑮ウダイ・プラカーシ選集 (インド)	平成23年12月	ウダイ・プラカーシ	石田 英明
⑯時の終焉(スリランカ)	平成24年 9月	マーティン・ ウィクラマシンハ	野口 忠司
⑰現代タイのポストモダン 短編集 (タイ)	平成24年12月	プラーブダー・ユン他	宇戸 清治
⑱ベンガル詩選集 『もうひとつの夢』(インド)	平成25年10月	ジボナノンド・ダーシュ 他	丹羽 京子

※平成19年10月「第43回日本翻訳出版文化賞」(日本翻訳家協会)受賞

<参考>

「アジアの現代文芸」シリーズについて

アジア諸国の現代文芸のうち、わが国への紹介が望まれる作品を翻訳・出版する事業で、アジアの国々の今日の姿をそれぞれの国が生んだ文芸作品を通じて理解することを目的としています。

本事業は営利を目的とせず、財団自らの手で翻訳・出版にあたるもので、企業財団として他に例のない事業として取り組んできましたが、作品(出版部数2,500部)は全国の大学、国公立図書館等に寄贈し、市販を一切行っていないことから、図書館に行かない限り手に取って読んでいただくことはできませんでした。

そこで、25年以上をかけて翻訳・出版してきた12カ国、62点の作品(平成25年12月現在)を、より多くの文学ファンの方に読んでいただけるよう、大同生命が平成24年度に創業110周年を迎えたことを契機として、同年度より紙の書籍の出版と並行して、既刊・新刊の電子書籍化を進めております。

<国別出版作品数>

国 名	出版作品数	国 名	出版作品数
インド	8点	バングラデシュ	2点
インドネシア	5点	フィリピン	1点
カンボジア	2点	ベトナム	3点
スリランカ	3点	マレーシア	4点
タイ	16点	ミャンマー	7点
パキスタン	9点	ラオス	2点
		計	62点

照会先：公益財団法人大同生命国際文化基金 事務局（北迫）
電話 06 (6447) 6357 / Fax 06 (6447) 6384

作品紹介

(1) ニ・ポロック(インドネシア)

バリ島サヌールに実在した女性の自叙伝風小説です。美しく魅力的なバリ島の風景の中で、ベルギー出身の有名な画家アドリアン・ジャン・ル・マヨール・デ・マープルと、生存中は名が知れわたっていたニ・ニョマン・ポロックというバリのレゴンの踊り子との愛の物語です。バリ島の宮廷舞踏レゴンの踊り子だった少女ニ・ポロックは、画家マヨール氏と18歳で結婚し、自分もまた彼を助けて生涯を芸術に捧げようと決心します。夫の亡き後、イタリア人医師と再婚しますが、彼は任務のためバリ島を離れてしまいます。ひとり残ったニ・ポロックは、亡き夫マヨール氏との思い出の家を美術館に改装し、彼の絵画作品の保存に努めました。(原作発表年 1976年)

著者ヤティ・マルヤティ・ウィハルジャ(1943-85)は42歳の生涯を終えるまでに30編におよぶ長編小説と多くの短編小説を遺しています。

(2) 初夏 霞立つ頃(ミャンマー)

ビルマ(現在のミャンマー)には椰子の木登りという職業があります。20～30メートルもある高い椰子の木に上って椰子汁を採る、命がけの仕事です。1960年代、社会主義建設の時代を背景に、貧しい木登りの息子エースオエは、抑圧と差別からの解放を目指し、村人たちと共同体をつくります。椰子の木の所有主の娘キンタンテューとの恋に苦悩しながらも、解放を夢見て闘い続けるエースオエ。この作品はマアウン・マアウン・ピューの処女作であり、ビルマ唯一の文学賞「国民文学賞」(1967年)を受賞しています。また、1972年には映画化され、“社会主義国建設の理想を讃えた美しい青春物語”と絶賛されました。この作品のタイトルは、タアウンゲー王朝末期の宮廷詩人が貧しい椰子の木登りの暮らしに心を痛めつつ歌った「初夏霞立つ頃…」という有名な一節から始まる長編詩からとられたものです。(原作発表年 1967年)

著者マアウン・マアウン・ピュー(1930-1992)はビルマが社会主義国家建設を目指していた時期(1962-88)、そのイデオロギーを小説によって大衆に啓発する役割を担った代表的な作家の一人です。

(3) ヌキのいない旅(インドネシア)

インドネシア西部の村ジャティワングを舞台に描く、著者20歳のときの自伝的青春小説。村での結婚、出産、子育て…やがて若い夫婦は大都市ジャカルタで新しい生活を試みますが、都会の生活に疲れた二人は故郷ジャティワングに戻ります。それから1年。「お前たち、ジャカルタに帰るなら、二人で帰っておくれ。子供は私たちと一緒にここに残しておくれ」…。母のたつての願いで娘のヌキをおいて、ふたりはジャカルタに向けて再び村を旅立ちました。村での生活、人々との交わり、祖母の病気などさまざまな出来事を通して、インドネシア、特に西部ジャワの慣習、自然環境、さらには家族関係や社会との関わりなどが淡々と綴られています。短編「祖父クウ」も収録。本作はフランス、旧ユーゴスラヴィアでも翻訳されました。(原作発表年 1958年)

著者アイブ・ロシディ(1938-)は数多くの小説、詩集を発表する他文芸評論でも活躍するなど、インドネシア文学界では重きをなしています。親日家でもあり、大阪外国語大学で客員教授として長年に亘って教鞭を執りました。

(4) 鱷の涙(フィリピン)

フィリピンは、過去においてスペイン、アメリカ、日本といった外国の支配を受けた結果、アジアの諸国のなかでも特異の文化を持つといわれています。この作品は、フィリピンのどこにもあるような町サンピロンを舞台に、権力者の腐敗と民情を描いたものです。“鱷”とあだ名されている狡猾な地主ドニャ・レオナ。小作人と住人たちは組合をつくり、鱷に闘いを挑みますが……。本書を通じて、フィリピン民衆の真の姿と心、そして現実の生活を感じとることができます。(原作発表年 1974年)

著者アマド・V・ヘルナンデス(1903-1970)は詩人、脚本家、労働運動や人権運動のリーダーとしてフィリピンの人々に知られています。

(5) テインペーミン短編集(ミャンマー)

ミャンマーが議会制民主主義からビルマ式社会主義へと体制を変え、社会が変遷していった時代を背景とする8編の作品が収録されています。

著者テインペーミン(1914-1978)は、作家は傍観者であってはならず、民族解放に貢献する作品を書くべきだと主張し、「進歩的」文学の概念を文芸界に導入しました。作家としてだけではなく、ジャーナリストとしても名を馳せ、戦後ビルマ政治の荒波に身を投じた人物でもあります。本書には、時代に翻弄される民衆の姿とともに戦後の激動を真摯に生きた著者の心の軌跡も記されています。(原作発表年 1966、1978年)
